

1. Appendix A

The Family Constellation (In the Old Testament)

p.501 1.13 ~

Turning to the group of the youngest born, one realizes that the ancients knew that these youngest children live in a different atmosphere than that of all the other siblings. The youngest, especially in a large family, is either the toy of the family or not superfluous eater. At times he is rejected not only by his siblings but also by his parents, because they did not want another child. Under any circumstances these youngest are the smallest, the weakest and, for the time being, the dumbest among their siblings.

Having a few forerunners also is discouraging to the possibility of overrunning them altogether, and one would either have to resign oneself to a life in the shadow of the siblings or to break away entirely from the family pattern, and look for one's own place in the sun.

It is prevalent with youngest children that they diverge from all the rules which govern the lives of the older ones. In fairy tales it is always the youngest who has been ridiculed by the older members of the family, who knows all the answers and goes out and wins the princess.

Because of the necessity to assert themselves in their own special way, the group of the youngest children in families represents the most unpredictable as to their behavior, and creates the most manifold deviations from the set patterns of their families.

Very often they have to fight their way in a roundabout manner as the older siblings stand in their way. So they too, because of their experiences in their family constellation, can become either "black sheep" or will excel in their choice of professions, of partners, and of their means to fulfil themselves.

家族布置（旧約聖書における）

末子のグループに目を向けると、古代の人々が末子が他のきょうだいとは異なる環境で育つことを理解していたことがわかる。特に大家族における末子は、家族のおもちゃか、あるいはまったく歓迎されない存在である。貧しい家庭では、食い扶持が増えたと腹立たしく思われたりする。時には兄弟姉妹だけでなく、もう子どもが欲しくはなかった両親から拒絶されることがある。いずれにせよ、末子は兄弟の中で最も小さく、最も弱く、そして当分の間は最も愚かな存在なのである。

数人の先行者がいることも、彼らを完全に追い越す可能性についての勇気をくじく。末子は諦めて兄弟の影に生きるか、家族のパターンから完全に離脱し、自ら陽の当たる場所を探すかのいずれかを選ばねばならない。

末子には、年上のきょうだいの人生を支配するあらゆる規則から逸脱する傾向が顕著に見られる。童話では、常に末子が家族の年長者からばかにされながら、あらゆる答えを知り、外に出てお姫様を勝ち取る存在だ。

自らの特別な方法で自己を主張する必要性ゆえに、家族における末子グループは行動が最も予測不可能であり、家族の定まったパターンからの最も多様な逸脱を生み出す。

しばしば彼らは、年上のきょうだいが邪魔をするため、回り道をして戦う必要がある。そのため彼らもまた、家族構成における経験ゆえに、「厄介者」となるか、あるいは職業やパートナーの選択、自己実現の方法において卓越するかのいずれかになるのである。

(後略)

2. 実践カウンセリング 監修 野田俊作

p.73 1.5～

末子

末子は永遠の赤ん坊

生まれ落ちたときからずっと赤ちゃんで、一度もその王座から滑り落ちたことがない。努力して自分の地位を確保し改善しようという意欲に乏しい人になりやすい。大人になっても自立できないで、「永遠の赤ん坊」のままであることもある。

両親やきょうだいに「甘やかされる」ことが多い。また、最年少なので、まともに取り合ってもらえないことがある。

そこで、自立心に欠け、自分の無力をアピールして、自分のことを人にやらせる手口を覚えるかも知れない。

単独子に似通っているが、末っ子には手本にする兄弟がいるので、対人技術は上手。

一番年上のきょうだいと組むことが多い。創造性に富むことが多く、それで頭角を表すこともあるが、才能を埋もれさせてしまうこともある。

むやみに飛ばす「スピード狂」になり、とても成功することがあるが、劣等感を持ち、やる気をなくすこともある。

3. 野田俊作の補正項 2007年08月03日（金）ICASSI 10日目

とうとう最終日だ。

1時間目はヘルムート・ホイシェン（ドイツ）が「童話とライフスタイル」という話をした。（中略）それはこんな話だ。

年取った王様がいて、3人の息子の誰に相続しようか決めるために、3つの羽を空に飛ばして、その羽について行って、その羽が落ちた先で美しいカーペットを探してくるように息子たちに言いました。上の2人は賢くて、羽を追いかけたりしないで、どこかの市場でよさそうなのをみつくりって買いました。末っ子は愚かな子で、羽について旅をしました。やがて羽が落ちた場所にガマの洞窟があって、そこの王様に頼むと、箱の中からきれいなカーペットを出して王子にくれました。それを持って帰ると、王様は末の息子を跡継ぎにしようと言いますが、兄たちは承知しないので、次は指輪を探してくるように王様は言いました。前回と同じように、兄たちは市場へ行き、末の息子は洞窟へ行き、指輪を手に入れました。王様は末の息子にしようと言いますが、兄たちは承知せず、3度目はきれいなお姫様をみつけてくるように王様は言いました。ガマの王様は、6匹のネズミが入った箱をもってきて、まわりにいるガマの中からどれでも好きなのを入れろと言いました。1匹を選んで入れると、きれいなお姫様に変わり、ネズミたちは6頭の馬に、箱は馬車に変わります。兄たちはまだ納得しなくて、姫が空中にある輪を飛び越せないとダメだと言いました。兄たちが連れてきた娘は百姓娘だったので飛び越せるかと思ったのですが、手や足の骨を折ってしまいました。末っ子が連れてきた姫は、さすがもとガマで、ちゃんと飛び越せました。そうしてとうとう兄たちも納得し、末の王子が王様になって、いつまでも国を上手に治めましたとさ。

（後略）

4. スサノオ (Wikipedia より)

スサノオ（歴史的仮名遣：スサノヲ、須佐之男、素戔嗚、須佐能袁、須佐能乎）は、日本神話に登場する神。

（中略）

神話上、現在の皇室とは、姉弟間のアマテラスとスサノオの誓約でうまれた男神正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命とその子で天孫降臨をした天邇岐志国邇岐志天津日高日子番能邇邇芸命を経て、スサノオは男系上の先祖にあたる[1]。

（中略）

『日本書紀』本文では伊弉諾尊とイザナミ（伊弉冉尊・伊邪那美命）の間に産まれ天照大神・ツクヨミ（月読）・ヒルコ（蛭兒）の次に当たる。

統治領域は文献によって異なり、三貴子のうち天照大御神は天（高天原）であるが、月読命は天、滄海原（あおのうなばら）または夜の食国（よるのおおくに）を、須佐之男命には夜の食国または海原または天下を治めるように言われたとあり、それぞれ異なる。須佐之男命は記述やエピソードが月読命や蛭兒と被る部分がある。

『古事記』によれば、スサノオはそれを断り、母神イザナミのいる根の国に行きたいと願い、イザナギの怒りを買って追放されてしまう[3]。そこで母の故地、出雲と伯耆の堺近辺の根の国へ向う前に姉の天照大御神に別れの挨拶をしようと高天原へ上るが、天照大御神は弟が攻め入って来たのではと思い武装して応対する。スサノオは疑いを解くために誓約（うけひ）を行った。

我的潔白が誓約によって証明されたとしたが、勝ったに任せてと次々と粗暴を行い、天照大御神は恐れて天の岩屋に隠れてしまった。そのため、彼は高天原を追放された（神逐）。

スサノオは大氣都比売に食べ物を乞うが、オオゲツヒメが鼻や口や尻から食べ物を出すを見て怒って殺した。オオゲツヒメの体の各部分から生じた蚕と穀物が養蚕と五穀の起源となつた[4]。

出雲の鳥髪山（現在の船通山）へ降った建速須佐之男命は、その地を荒らしていた巨大な怪物八俣遠呂智への生贊にされそくなっていた美しい少女櫛名田比売命と出会う。

スサノオは、クシナダヒメの姿形を歯の多い櫛に変えて髪に挿し、ヤマタノオロチを退治する。そしてヤマタノオロチの尾から出てきた草那藝之大刀（くさなぎのたち、紀・草薙剣）を天照御大神に献上し、それが古代天皇の権威たる三種の神器の一つとなる（現在は、愛知県名古屋市の熱田神宮の御神体となっている）。その後、櫛から元に戻したクシナダヒメを妻として、出雲の根之堅洲国にある須賀（すが）の地へ行きそこに留まった。

そこで、

夜久毛多都 伊豆毛夜幣賀岐 都麻暮微爾 夜幣賀岐都久流 曾能夜幣賀岐袁（古事記）

夜句茂多菟 伊弩毛夜霸餓岐 菴磨語昧爾 夜霸餓枳都俱盧 贈迺夜霸餓岐廻（日本書紀）

やくもたつ いづもやえがき つまごみに やえがきつくる そのやえがきを（読み：ふりがな）

八雲立つ 出雲八重垣 妻籠に 八重垣作る その八重垣を

と詠んだ。記紀で最初の歌であることから、日本最初の和歌ともされる。

（後略）

5. 野田俊作の補正項 2017年11月27日（月）冗長性を見抜く

（前略）

クライエントの話の中には「困った人」が出現する。なぜ「困った人」が出現するかといふと、クライエントのある《冗長性》が「困った人」を作りだすからだ。たとえば、長子は家の内で起こることのすべてを知っていたい人が多いのだが、末子はそうでもない。だから末子は、長子が喜ぶだろうと思って、長子に内緒で親と相談して、長子へのプレゼントを決めたりする。長子は、自分に内緒で相談されたことを、逆に言うと自分を除く全員が知っていて自分が知らないことを、ひどい侮辱だと感じて怒り出す。しかし末子は、なぜ長子が怒るのか理解できない。つまり、末子にとって長子は「困った人」に見える。しかし、それは末子が長子を理解しないで勝手に行動した結果であって、すくなくとも末子を主役にしてサイコドラマをするかぎり、長子にはなにも問題はなく、末子の「見落とし」に問題があると読み解かなければならない。

（後略）

6. 絵本「ティッチ」パット・ハッチャンス 作・絵

ティッチは、ちいさなおとこの子でした。

ねえさんの メアリは、ティッチより ちょっと おおきくて、

にいさんの ピートは、ずっとおおきな子でした。

ピートは、とってもおおきな じてんしゃを もっていました。

メアリも、おおきな じてんしゃを もっていました。

でも、ティッチのもっていたのは、ちいさな 3りんしゃでした。

(後略)

7. Lectures to Physicians & Medical Students, Medical Course at Urban Hospital, Post-graduate Lectures at Long Island College of Medicine by Alfred Adler (The Collected Clinical Works of Alfred Adler Volume8)

Cases of Enuresis p.67-

Here is another child, fourteen years of age, poor in all her subjects, with arithmetic as the worst. "She is a youngest child among three and everyone in the home babies and pampers the patient, doing everything for her." "She says, in spite of the fact that she is very poor pupil, she likes school quite well and is never late." Here is a variation. We can conclude from this information that she must have a kind teacher. But the teacher could not make her work in the proper way. This child does not cooperate. We know why, because she had been trained to expect her mother and sisters to do everything for her; therefore, in school where she would work independently, she cannot progress.

"She has very little preference for any subject. Her family wants her to go to high school and later to college as her sisters do, but she insists she would have to study too much." This is an interesting expression because she says what we have seen in all these cases. Because the want to have everything easy, studying is too much for them.

"She always wants to have companionship; does not like to be alone. She does not like to go to bed at night; talks in her sleep. She is vain. She is healthy and well developed; no organic deficiency." She has all the signs of a pampered child who feels ahead of others because of her appearance. She overemphasizes appearance. All other things are worthless for her and must be attended to by others. She exploits the cooperation of others because she has been trained in this way. "Boys like her but she is not particularly interested in them."

"She remembers that once she lived in a very nice hotel and it is her wish to live in a hotel permanently." This probably means she feels fine in a hotel because she can command others; she can ring the bell and water is brought, or the maid comes and does everything. She rules in a hotel. This is probably also why other people like hotels, restaurants, and coffee-houses. Perhaps it is expressed more in Europe than in America.

"She has no ambition at all." She has lost all hope in school, so she does not work anymore. She is sure that only her sisters can succeed. Again, others must function; we can understand why she wets the bed. Taking care of everything is not her job. It is the job of others. Because she is somewhat similar to a young baby who must be taken care of in every way, we can almost say she has not grown up. The infantile phase is not over in her case. It appears to be a failure in development and growth, but it is not so; it is her goal to develop this way. In a way it is an intelligent goal for a child who wants to be the boss, to rule, command, and control others, because no one is as strong as a baby. A baby really is the strongest person. Everybody has to obey him, and has responsibilities while the baby has none. This girl is exceptional in that she is very neat. Although her neatness is unusual, we can understand it because she is vain and pays attention to appearance.

"She is finicky, and must be called two or three times in the morning." Getting up is also a duty and obligation of others. "The mother was asked if the patient bossed her and she said no but that she would like to." The patient probably bosses her, but the mother does not want to admit it. "The father does not see the patient much because he does not get home until evening when she studies." Her home has probably always been this way and has not provided proper training for her. She has only her mother and

sisters with whom she could develop her social interest. No one else.

“The patient is very talkative.” Being talkative means merely impressing the family as being restless does. Being talkative irritates the ears of others; being restless irritates the retina of others. Therefore, someone with these characteristics arouses the attention of others, and this girl really wants to be the center of attention.

夜尿症のケース

(前略)

もう一人の児童は14歳で、全教科が苦手だが、算数が最も悪い。「彼女は三人の末っ子で、家族全員が彼女を甘やかし、何でも代わりにやってしまう」と報告されている。「成績は非常に悪いが、学校はかなり好きで、遅刻は一度もない」と本人は述べている。そういうバリエーションがある。この情報から、彼女には優しい教師がいると推測できます。しかし教師は彼女を適切な方法で学習させられませんでした。この子は協力的ではありません。その理由は明らかです。母親や姉たちが全てをやってくれると期待するよう育てられたため、自立して学ぶべき学校では進歩できないのです。

「彼女はどの科目にもほとんど興味を示さない。家族は姉妹たちと同じように高校へ進み、その後大学へ行くことを望んでいるが、彼女は（それには）勉強しすぎないとならないと主張する。」これは興味深い表現だ。なぜなら、これまで見てきた全てのケースで共通する点を彼女が口にしているからだ。彼らは全てを楽に済ませたいがために、勉強は負担が大きすぎるのだ。

「彼女は常に誰かと一緒にいたいと望み、一人になることを嫌う。夜寝るのも嫌がり、寝言を言う。虚栄心が強い。健康で発育も良く、身体的な欠陥はない。」 彼女は外見ゆえに他より優位に立っていると感じる甘やかされた子供の兆候を全て備えている。外見を過度に重視し、他の全ては価値がなく他人に世話をされるべきものだと考える。そうした訓練を受けてきたため、他人の協力を搾取する。「男子は彼女を好むが、彼女自身は特に興味を示さない」

「彼女はかつてとても素敵なホテルに住んでいたことを覚えており、ホテルに永住するのが願いだ」と。おそらくこれは、ホテルでは他人を指揮できるから居心地が良いという意味だろう。ベルを鳴らせば水が運ばれ、メイドが来て何でもやってくれる。ホテルでは彼女が支配者なのだ。おそらくこれが、他の人々がホテルやレストラン、喫茶店を好む理由もある。アメリカよりヨーロッパにより顕著に表れているのかもしれない。

「彼女には全く野心がない。」学校への希望を完全に失ったため、もう努力しない。成功できるのは姉妹だけだと確信している。繰り返すが、機能するのは他者だ。彼女が夜尿症である理由も理解できる。全てを世話するのは彼女の仕事ではない。それは他者の仕事だ。あらゆる面で世話を必要とする幼い赤ん坊に似ているため、彼女は成長していないと言つても過言ではない。彼女の場合、幼児期が終息していない。発達と成長の失敗のように見えるが、そうではない。これが彼女の目指す成長の仕方なのだ。ある意味で、支配者となり、他人を統制し支配したい子供にとって、これは賢明な目標だ。なぜなら、赤ちゃんほど強い存在はいないからだ。赤ちゃんは真に最強の存在である。誰もが彼に従わねばならず、責任を負う一方で、赤ちゃん自身は何の責任も負わない。この少女は、非常に几帳面である点で特異だ。その几帳面さは異例ではあるが、彼女は虚栄心が強く外見に気を遣うため、理解できる。

彼女は気難しい性格で、朝は二度三度起こさなければならない。起床もまた他者の義務であり責務である。「母親に患者があなたのボスのようかと尋ねると、違うというが、おそらくそうだろう」。おそらく患者はボスのようなのだが、母親はそれを認めたくないのだ。「父親は患

者とあまり顔を合わせない。彼女が勉強している夕方に帰宅するためだ」彼女の家庭環境はおそらく昔からこうであり、適切な躾が施されてこなかった。彼女が共同体感覚を育める相手は母親と姉妹だけだ。他に誰もいない。

「患者は非常におしゃべりです」おしゃべりであることは、落ち着きがないことが家族に印象づけるのと同様、単に印象づけようとする行為に過ぎない。おしゃべりは他人の耳を苛立たせ、落ち着きのなさは他人の網膜を苛立たせる。したがって、こうした特徴を持つ者は他人の注意を引き、この少女はまさに注目の的になりたいと望んでいるのだ。

(後略)

以上